

# 中国仏教における「感応」と「感通」

諏訪隆茂

はじめに

中国の唐代においては、仏教信仰によって体験する不思議な現象である靈験が記された僧伝が多数編纂された。その内容は多種多様であり、整理するのは困難である。道宣はこのような靈験を「感通」という語によって解釈し、「感通」の項目や標題を設けて編纂している。また彼は、「感通」と「感応」は同意義であるとし、仏教信仰における不思議な現象として理解していた。そのような解釈は、後代の靈験を示す現象を編纂する者に影響を与えている。

本稿においては、道宣における「感応」と「感通」の解釈を明らかにし、彼の解釈が後代において成立した靈験談に与えた影響を検討する。また、中国仏教において靈験談が担った役割についての一考察を述べるものとする。

## 一 道宣の「感応」と「感通」の解釈

道宣が「感通」に大いに関心を寄せていたことは、『続高僧伝』中に「感通」の項目を設けていることや、『集神州三宝感通録』や『道宣律師感通伝』などの「感通」という語を標題に載せる著作があることから知られる。それでは、道宣が「感通」という語をどのように理解していたのかということを彼の記述中に見ていきたい。彼は『続高僧伝』の「感通」の項目における「法順伝」において以下のように述べる。

將に黃渠を度らんとするに其の水は汎溢す。厲渉（れいしょう）して度るに、岸は既に峻滑なれば登ると雖も還た墮つ。水は忽ちにして流を断てば、便ち陸に随つて度る。順が岸に上るに及び水は尋いで還た復す。門徒は目覩するも其の然るを測らざる也。幽顯に感通する所以に声は朝野に聞こゆ。<sup>1)</sup>

この逸話における「感通」の現象とは、氾濫している河の流れが止まり、そこを渡ることができたという不思議な出来事のことである。つまり道宣は、「感通」とは、仏教信仰者に起こる不思議で奇跡的な現象と解釈していたのである。

また「知能伝」においては、

初め基を置く日、疏山に地を鑿（うが）ち、土に入るること三尺にして古石函を獲。長さ八尺可り、深さ六尺許りなり。表裏は平滑にして殆ど人の運ぶに非ず。所謂の感に至り冥に通じ、祈り有りて斯の応なり。舍利を下すに及び、大いに光明を放ち山宇に挺溢す。<sup>(2)</sup>

と述べている。この逸話における不思議な現象とは、人の力では運ぶことができない石函を得ることができ、そこに舍利を下すと、舍利から光明が放たれ辺りを照らしたということである。その現象の起因を解説するのが「感に至り冥に通じ、祈り有りて斯の応なり」という記述である。つまり、「感じ、通じる」という祈りの働きかけがあつて、仏・菩薩が「応じて不思議な現象を起こす」という理解である。道宣が仏教信仰における不思議な出来事を「感通」として解釈する背景には、道宣が「感通」という語には予測的に、仏・菩薩が応じるという意味が含まれているという理解があるのである。

以上が道宣の「感通」の解釈であるが、その一方で彼は「感応」という語をどのように解釈していたのであろうか。道宣の『集神州三宝感通録』の序文において以下のような記述がみられる。

夫れ三宝の利見、其の来れること久しきなり。但だ信と毀と相競うを以ての故に、感応することの縁有るなり。<sup>(3)</sup>

これは、「感通」の語を標題に挙げる書において、その「感通」の現象を「感応」という語によつて解釈していることを示す記述である。さらに、具体的な例を示せば、以下のような記述が挙げられる。

帝、曰く「今、仏法重ねて興り、舍利塔を立つれば、必ず感応有らん」と。果たして言の如くなる矣。

雍州の仙遊寺に塔を立つるに、天、陰雪を降らすも、舍利將に下らんとするや、日の光、朗らかに照らし、函に入れるに及びて、雲合じたり。……（中略）……秦州の静念寺に塔を立つるに、基を定め已わるに、瑞雲再び雪下を覆い、草木は華を開けり。函に入れるに、光照らし、声贊せり。

これは、舍利塔を建立すれば、必ず感応の現象が現れるだろうと述べた帝の言葉に対して、実際に舍利塔を建立した際の感応の現象を具体的に示した記述である。この舍利塔建立の際に起こる祥瑞や奇瑞の現象は『続高僧伝』中においては、「感通」下の項目においてまとめられて収録される逸話である。道宣は、舍利塔建立の際に起こる不思議な現象を、「感応」と「感通」の二つの言葉を使用して理解していたのである。

以上のことから、道宣は「感通」と「感応」の語をほぼ同義とし、仏教信仰における奇瑞や祥瑞などの不思議な出来事を意味するものとして解釈していたことが知られよう。

## 二 『華嚴經』の応驗記

華嚴宗の大成者である法蔵の著作中に『華嚴經』の様々な事跡について記録された『華嚴經伝記』というものがある。この書の中には、『華嚴經』と関わりを持つ靈驗の記述が認められ、その靈驗を「感応」と「感通」の語によつて解釈できる僧伝が収録されている。「徳円伝」には以下のように記されている。

又、青衣の梵童子有り。無何（いくばくなく）して至る。手に天華を執りて、忽ち供養を申ふ。前後に靈感し、雜沓して、相い仍（よ）る。二歳を経る迄に書写し方に畢んぬ。盛るに香函を以てし、諸の宝帳に置き、彼の浄堂に安ず。毎に頂調を申ふ。後に転読するに因つて、函より異光を発し、潔敬するに至る。事、今古を絶す。茲の微瑞の若きは、蓋し亦、罕儔（かんちゅう）ならん。此の經、遽（には）かに相い付授するに、今に至るに五師なり。後人、淨に入りて転読す。時に靈応有り。今は西大原寺の僧賢首の処に在り、守護し供養せり。

ここにおいて記される「靈感」と「靈応」とは、「感応」という不思議な現象を示す語を背景として扱われているのである。「靈感」が示すものは、童子が手に天華を持つて供養を述べたことである。また「靈応」が示す現象とは、經を転読した時に函から異光が放たれたであろうことが想定されるので

ある。つまり「靈感」と「靈応」とは、「感応」という不思議な現象を意味する語を基にして解釈される語だといえよう。一方、「靈裕伝」には、「感通」の語によつて示される現象の記述がみられる。

会々（たまたま）斉后、患に染まり、此の典（『華嚴經』）の玄を照らすを聞くことを願ふ。諸統は裕を挙げて之に當つ。時に雄鶏一頭有り。常に衆に随つて聴く。講散するに逮び、乃ち、大いに鳴きて高く飛び、西南の樹の上に夜を経て終わる。（斉后）俄にして疾遂に瘳（な）ゆること有り。斯れ亦た、感通の明応なり。

この逸話は、斉后が病を患つた時に、『華嚴經』の講義を聴いたところ、その病が癒えたというものである。この逸話における不思議な現象とは、『華嚴經』の講義に同席した雄鶏が講義を聞き終わると大きく鳴いて飛び立ち西南の樹の上で命を終えたという現象である。それは、病が癒える瑞兆として示された現象である。ここにおいては、このような現象は、「感通の明応」として「感通」という語によつて解釈されている。

つまり、『華嚴經伝記』における「感応」と「感通」の解釈は仏教信仰における不思議な現象を示すものである。それは、道宣の「感応」と「感通」の解釈と同様のものである。そのことは、先に挙げた「靈裕伝」が道宣の『統高僧伝』を引用したものであり、その他の僧伝においても道宣からの引

用と思われる僧伝が多数記載されているということから判断しても、この『華嚴経伝記』中の靈験の記述は道宣の解釈の影響を受けていることが知られるのである。

さらに『華嚴経』という經典の伝記中で特に「感応」ということに注目して編纂されたのが、胡幽貞によつて編纂された『大方広仏華嚴経感応伝』である。この書の中で「感応」の現象について述べられている一例として次の「樊玄智伝」を挙げる。

時に夜に誦することありて、口より光明を放つ。照らすこと四十余里に及ぶ。光色は金の如し。遠近に驚異す。或いは、有る人往き尋ね山に到る。唯だ居士の経を誦するのみにして、口中に光明を見る。<sup>(7)</sup>

このような逸話に示される幽貞の「感応」の解釈は、口の中から光が放たれたという不思議な現象のことであり、道宣の「感応」の解釈とに差違を認めることはできないのである。やはり、ここにおいても「感応」とは、仏教信仰によつて起こる不思議な現象を意味するのである。

### 三 『法華経』の応驗記

仏教信仰に関する不思議な現象について記された僧伝中で特に『法華経』という經典と関わりがある逸話が収録されているのが、僧祥の『法華経伝記』と慧祥の『弘賛法華伝』で

ある。この両書には、道宣の『続高僧伝』や『集神州三宝感通録』から引用した僧伝が多数収録されており、やはり道宣の「感通」と「感応」の解釈が影響していると想像できるのであるが、実際に「感応」と「感通」に関する記述は『法華経伝記』と『弘賛法華伝』の双方に同様の内容で収録される以下の二伝に認められる。まずは「感通」に関して『法華経伝記』に載せられている「玄秀伝」を挙げる。

常に『法華』を誦し、毎に微異を感ず。未だ以て怪と為さず。時に、炎暑に属して、同友、涼を逐い、秀を召して来たらしめ、談笑有らんと欲す。既に房の前に至りて、但だ羽衛、嚴肅にして人馬、偉大なるを見る。怖れて返りて告ぐ。同じく往き共に觀るに初めの如くにして異ならず。転じて後門に至り、其の徒は弥いよ盛なり。上を望みて塙塞(てんそく)すること際まり無し。多くは象馬の類に乗る雜鬼神なり。乃ち其れ感通なるを知るなり。<sup>(8)</sup>

これは、『法華経』を誦した者が偉大な鬼神を見たという現象を「感通」によつて解釈している逸話である。

また、「感応」に関する記述で『法華経伝記』に載せられている伝を示せば以下のようなものである。

齊の文成の世、兪州東看山の側、人、地を掘ること有り。一処の土を見るに、其の色白にして旁と異なること有り。一物の状を尋ね見るに、人の面臂の如し。その中に舌有り。鮮紅、赤色なり。…(中略)・・・珍、勅を奉りて彼(かしこ)に至る。諸の『法華』

を持する沙門を集め、炬を執りて斎を潔め、遶旋して呪して曰く「菩薩の涅槃の年代已に遠し。像法流行し、無謬者を奉り、感應を現ずることを請ふ。」と。纔かに始めて、発声するに、此の唇の舌、一時に鼓動す。響くこと無しと雖も、及びて読誦と相似す。諸の同見の者、毛豎たざること無し。<sup>⑤</sup>

この逸話中での「感應」の現象というものは、地面を掘つて見つけられた舌が『法華經』の誦經によって供養されると、読經にあわせて鼓動したという現象である。

以上のような「感通」と「感應」の現象から判断すると、この『法華經伝記』と『弘贊法華伝』における「感應」と「感通」の解釈は、仏教信仰における不思議な現象を意味しており、前代の道宣の解釈を踏襲しているものといえよう。

### 小結

以上、道宣の靈驗を示す記述から、『華嚴經』や『法華經』に関する応驗記に至るまで「感應」と「感通」という語をキーワードに、その両者が意味するものについて検討を行った。その結果、次のようなこと明らかとなった。「感應」と「感通」の語は、道宣においては同意義として扱われ、仏教信仰に関する不思議な現象を意味するものである。そのような解釈は、彼以降の時代に成立する靈驗の逸話を収録した『華嚴經伝記』、『大方広仏華嚴經感應伝』、『法華經伝記』、『弘贊

法華伝』等における「感應」と「感通」の解釈に影響を与えている。

またこのような応驗記が中国仏教において担った役割を考えると、それは、衆生教化というものを資助するものではなかったかと思われる。それは、『華嚴經伝記』、『法華經伝記』、『弘贊法華伝』において整理された靈驗の現象は、特に、講解、諷誦、転読、聴聞、受持、読誦、書写、遺身、供養といった項目に載せられており、それらの逸話は、『華嚴經』や『法華經』の信仰形態や修行の実践を具体的な形で示したものであるといえるからである。

- 1 『大正蔵』第五〇巻、六五三頁c。
- 2 同前書、六七六頁a。
- 3 『大正蔵』第五二巻、四〇四頁b。
- 4 同前書、四一一頁c、四一二頁a。
- 5 『大正蔵』第五一巻、一七一頁a。
- 6 同前書、一六〇頁a、b。
- 7 同前書、一七四頁b。
- 8 同前書、六七頁b。
- 9 同前書、三二頁c。

〈キーワード〉 感應、感通、靈驗、応驗

(北海道大学大学院)

## 7. Huisi's Preliminary Step in *samādhi* of the Lotus *sūtra*

Daigo TSURUTA

The *samādhi* of the Lotus Sūtra was taught to Zhiyi by Huisi on Mount Dasu. At that time Zhiyi reached a certain state. But Huisi judged what Zhiyi realized was the preliminary step. Huisi's preliminary step was to preach in accordance with the various living beings based on the Meaning of the Course of Ease and Bliss in the Lotus Sūtra. There are two ways. One is to preach infinite meanings in accordance with living beings, the *sāmadhi* with infinite meanings (無量義三昧). The other is to manifest various figures in accordance with living beings, the *samādhi* that manifest the various figures universally (普現色身三昧). After the two *samādhis* that manifest infinite meanings are obtained, the *samādhi* of the Lotus Sūtra that melds the infinite meanings into one is obtained. That is the perfect state at last.

## 8. The Meaning of *ganying* 感應 and *gantong* 感通 in Chinese Buddhism

Takeshige SUWA

Since the seventh century, several miraculous stories of Buddhism were edited in China. The famous historian of Chinese Buddhism, Daoxuan, understood those stories through the ideas of *ganying* and *gantong*. He interpreted the two words as having the same meaning, signifying specific and amazing phenomena about faith in Buddhism. His interpretation of the two words influenced later editors.

It is the aim of this paper to define Daoxuan's interpretation of *ganying* and *gantong* and its influence on later generations, and also to examine the role of miraculous stories in Chinese Buddhism.

## 9. On the Treatise on Two Bodies of the Buddha in the *Wangsheng lunzhu* 往生論註 and in the *Mahāprajñāpāramitopadeśa* juan 29

Nobuo SONE

No one has discussed the relation between the treatise on two bodies of